

## 〈資料紹介〉

## 拓本の功罪

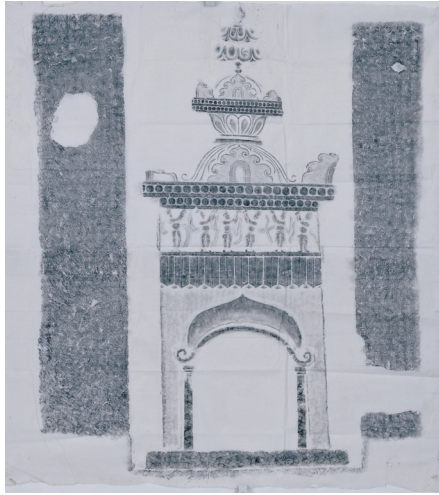
教授 大内文雄  
(東洋史〈中国史・中国仏教史〉)

中国・河南省安陽市西方の山間部に今も残る宝山靈泉寺石窟には、靈泉寺を挟んで東に東魏の道憑による大留聖窟（東魏・武定4年-546-建）、西に隋の靈裕による大住聖窟（隋・開皇9年-589-建）の二つの石窟があり、またそれぞれの近くに合計200を越える塔龕群が遺されている。靈裕の大住聖窟には入り口の左右に那羅衍・伽毘羅の兩護法神將の見事なレリーフがあり、それをくぐると壁面全体に多数の經典が刻まれ、仏法の消滅を予見する末法思想に由来する經文を読むことができる。次頁に掲載する写真は、そのような塔龕群に属するものである。これらの多くは灰身塔と呼ばれ、他に散身塔、支提塔、碎身塔や、また短く影塔、靈塔、像塔などの呼び方で題記・銘文が彫られ、その塔龕にはいずれも安陽の寺院やこの靈泉寺に関わりある僧や尼僧、在俗の信者である優婆塞・優婆夷の生前の姿が刻まれている。灰身や散身とは佛教の法、すなわち荼毘の法に則って火葬に付され葬られたことを示す。隋から唐の半ばまで、およそ6世紀後半から8世紀半ばまでのものが大多数を占めるこれらの灰身塔は、戦前から比較적으로よく知られ、そこに刻まれている題記や塔銘は隋・唐時代の文字資料として貴重なため、題記・塔銘だけの拓本がセットになって販売されていたようである。近年になると日本にもセットとして輸入されるようになり、掲載の拓本写真はそのような中でも灰身塔全体の拓本を混じえる一風変わったセットの形で蒐集された。右側の写真はその題記に「光天寺故大比丘尼僧順禪師散



身塔」(唐・太宗貞觀14年-640-造 縦210cm×横130cm)とあり、左側は「大唐願力寺故(神)瞻法師影塔之銘并序」(則天武后・天授2年-691-造 縦152cm×横148cm)とある。主人公の肖像がレリーフとなって塔龕に納められ、塔龕の周囲に題記が、その左右、或いは片方に塔銘が刻まれている。中にはこれらのように比較的長文の塔銘を伴うものもあり、我々に重要な情報を与えてくれている。前者の僧順は塔銘によれば、当時、浄土教と並ぶ新興の仏教であった三階教を奉ずる尼僧、従って光天寺は尼寺である。後者の神瞻は、題記には「大唐」と記すけれども、塔銘には正しく「大周の天授二年」と言い、いわゆる則天文字が使われている。

筆者はこれらに付随する塔銘を史料として用いるために、以前からこれらの中の比較的長文のものを解読しようと努めてきたが、塔龕には長い時間の経過と共に欠落や摩滅が生じており、読みづらい箇所が多い。しかも大抵の拓本は写真のように左や右にある銘文を一具として採拓するのみで、塔全体の像は伝えられず、これらの塔銘がどのような塔龕のどこにどのような形で残されているのかを知



大唐願力寺故瞻法師影塔之銘并序



光天寺故大比丘尼僧順禪師散身塔

る由もなく、やむなく想像をはたらかせながら読みまざるを得なかったのが実情であった。そういった隔靴搔痒の感はここに示した塔銘を含む塔龕全体の拓本によって、これまでの疑念と共に氷解したのであるが、同時に拓本そのものの持つ罪、限界を痛感することとなった。限界とは、銘文などを漢文史・資料、あるいは単に文字記録として重視し、他を顧みないことから生ずる情報の偏りである。例えばここに掲げた神瞻塔銘は、一見してわかるように、神瞻像を彫り出した塔龕の左右に長文の銘文が刻まれている。しかも全体の拓本によって判明するように、塔銘右側下部の毎行6字が欠け、末端の毎行2字がころうじて残されている状態となっている。そのためかこの神瞻塔銘の拓本には、右側の欠落部分と末端の7行とをとらずに流布しているものが存在する。このような情報不足の拓本によって銘文を解読しようとする、はなはだ難渋させられることになる。本学博物館に所蔵するセットの中の神瞻塔銘拓本はそのようなことはなく、かえって旧拓にも見えない字が読める良好な状態を留めている。

一方で、ここに掲示した拓本は、新たな興味・課題を意識させる。灰身塔や影塔、像塔などと呼ばれるように、塔龕には、文字通り

に、弔われている僧・尼、優婆塞・優婆夷の肖像が浮き彫りされている。佛教石窟の壁面に供養者の像が絵画・レリーフとして描かれることはあっても、中国のこの時代において、際立つ特徴を持つ塔形をともなって被葬者の肖像が製作されたこのような遺跡は、他に例がなく、男性の僧・優婆塞はもとより、とりわけ女性の尼・優婆夷の肖像が造られた例を知らない。男性である神瞻法師の塔銘の、「敬焚靈骨、起塔供養（敬しんで靈骨を焚き、塔を起て供養す）」「式図影像（式しんで影像をえがく）」、また「因崇巖而鏤像（崇巖に因りて像を鏤む）」という文章が実体あるものとして、現地に遺存することもさりながら、大比丘尼と称される僧順禪師の塔銘の、「送柩於屍陀林所、弟子等謹依林葬之法、收取舍利、建塔於名山（柩を屍陀林所に送り、弟子等謹しんで林葬の法に依り、舍利を收取し、塔を名山に建つ）」「刊石図形（石に刊み形をすがた えがく）」と記される、特に女性の場合、優婆夷を含めての意味と意義を、現代人の我々がどのように理解し表現しえるのか、これらの拓本は問いかけている。僧順禪師像の頭部はもはや欠損してしまっている、拓本によってもたらされる迫力には、移録され整理された文献史料とは別次元の魅力がある。